

◆第5分科会 廃棄物・資源循環 暮らしから見る廃棄物・資源循環

●コーディネーター	健康・環境デザイン研究所 所長	中村 恵子
●話題提供者	北海道恵庭市環境政策室計画調整課	数井 孝志
	北海道富良野市市民環境課環境係 係長	小笠原 竹伸
	北海道ニセコ町町民生活課 課長	千葉 敬貴
●コメンテーター	環境文明 21 客員研究員 / 環境自治体会議アドバイザー	庄司 元
	東京都足立区副区長	石川 義夫
	北海道斜里町長	馬場 隆

●コーディネーター 中村恵子

はじめに日本の廃棄物・資源循環政策の現状を俯瞰したい。循環型社会・自然共生型社会・低炭素型社会の目標を掲げて、持続可能な社会を目指している。そのため、廃棄物・資源循環について考える場合、どの目標に当てはまるのかを考えなくてはならない。昨年第3次環境基本計画が策定され、我が国における3Rの進展、資源の確保、そして安心安全に向けた様々な取り組み、さらには世界規模での取り組みの必要性ということで、新たな目標を掲げている。平成22年度までの目標についてはおおむね達成されているという状況。



コーディネーター 中村氏

廃棄物の分野から出ているCO₂は2.6%である。それにもなって排出側ではごみ有料化による発生抑制の取り組みや、分別排出の徹底が求められており、処理側では3Rの一層の推進と最終処分量の削減や、廃棄物発

電や熱利用が求められている。

ごみ総排出量は年々減っている。新たな廃棄物処理施設整備計画が閣議決定され、3Rの推進とともに、災害対策や地球温暖化対策の強化を行い、強靱な廃棄物処理システムを構築すると掲げられている。方向性としては市町村の一般廃棄物処理システムを通じた3Rの推進、地域住民の理解と協力の確保、広域的な視野に立った廃棄物処理システムの改善といったことが盛り込まれた整備計画が進められる。既存の廃棄物処理施設の計画的な維持管理、施設の長寿命化・延命を図る。資源の有効利用や地球温暖化対策の具体的な指標を求め、優先順位を決めて進めていく。

廃棄物系バイオマスの利活用の推進も言われている。廃棄物処理施設が東日本大震災で災害廃棄物処理において大きな役割を果たしたことから、災害対策の強化も同時に行うということが方向性として出されている。高効率ごみ発電設備や、バイオガス化施設の導入推進も掲げられている。

今日は恵庭市、富良野市、ニセコ町からそれぞれ発表していただく。論点としては、排出抑制政策とそれに関わる住民理解のプロセス。そして分別については自治体の分別理念と住民の理解・納得を得る施策はどのようなものなのかということ。ディスカッションでは、施策の効果や住民力をどう発揮するかについて、そして今後の課題についてもお話できればと思う。その中でコメンテーターや会場の皆さんからもお話を聞きたい。

個人的な見解として論点を追加したいが、持続可能

な地域を作っていくうえで、廃棄物処理施設の機能が重要であると考えている。廃棄物処理施設は環境保全施設であり、都市における肝臓の役割を持つほか、熱をはじめとしたエネルギーや資源の回収施設でもある。そういう重要な役割を持つ施設だが、地域住民にとってはなかなか受け入れがたいものである。そのため、地域に受け入れられるリスクコミュニケーションが必要となってくる。つまり、リスクを判断するうえで必要な客観的情報をしっかりと開示することが求められる。そのため、話題提供者の皆さんには廃棄物処理施設が住民にとって“Not in my backyard”ではなく、“Please in my backyard”に変えていくための施策がもしあれば伺いたい。

●話題提供①

「生ごみの分別によるごみの減量化とエネルギー利用」 北海道恵庭市環境政策室計画調整課 数井孝志

恵庭市は新千歳空港の隣町にあり、人口およそ6,800人のまち。恵庭市では平成14年度に焼却施設の休止に伴い、生ごみを含む可燃ごみを埋め立て処分している。平成24年には生ごみの分別収集が開始され、9月には生ごみ処理施設が供用開始されている。家庭ごみは、平成22年に生ごみの回収を有料化しており、2円/L程度の料金設定になっている。収集は週に2回となっている。

次に、恵庭市のごみ処理システムの将来像についてお話しする。平成20年の計画では、焼却施設の建設を予定している。また、生ごみについては平成24年に施設を整備しており、下水処理場においてバイオガス処理を実施中で、発電・暖房に利用されている。生ごみのバイオガス化処理の目的としては、発電・暖房だけでなく、埋め立て地のメタンガスの発生や、悪臭の抑制によってカラスの飛来も減少しているほか、処分場の延命にもつながっている。

生ごみのエネルギー利用には、生ごみの計画量の確保と、適正な分類が必要であるため、一般家庭と事業者の協力が欠かせない。平成23年11月から、平成24年3月にかけて、各地区の住民説明会と、事業者説明会を開催した。住民説明会は115回、事業者説明会は7回と、土日・夜間を中心に開催し、分別を適正にさせていただくため、生ごみ分別辞典を作成した。家庭ごみの分別による減量効果としては、平成23年度と平成25年度の総量を比較すると、8%の減量を実現している。これは住民説明会で、分別だけでなく水切りの徹

底や、コンポストの利用も奨励してきたことが貢献していると思う。コンポスト・生ごみ処理機等の購入費の助成も行っており、段ボール堆肥化資材の助成は累計で5,382件となっている。恵庭市の世帯数は32,000世帯強であり、その中で5,000件なのでかなりの割合であると言えると思う。

次に、生ごみ処理関連施設について。生ごみ・し尿処理場と下水処理場が隣接して高効率の処理を実現している。生ごみの処理能力は18t/日であり、し尿・浄化槽汚泥は15t/日を処理している。下水処理場では下水汚泥を日平均243m³処理しており、下水汚泥と生ごみ・し尿についてはバイオガス化の原料となっている。生ごみ処理施設だが、平成24年9月に供用が開始された。生ごみは地下に破砕分別器が設置されており、最初に処理を行う。今の施設で生ごみ収集量が平成24年と平成25年でそれぞれ3,889t、3,864tとなっている。施設設計処理量が4,057tなので、施設能力を十分発揮できる収集量を確保できている。施設ではメタン発酵により消化ガスを回収している。全体で消化タンクは8基、ガスタンクは2基設置されている。

平成23年度と平成25年度の消化ガス発生量の比較をすると、平成23年度は約130万m³で、生ごみ投入開始後の平成25年度は160万m³ということで、23%増加している。発電用ガス量は約70万m³ということで、44%を使用していることになる。下水処理施設に設置されているマイクロガスタービン発電機は2基で、施設内電力の1/3程度を賄っている。発電量と電気使用量は、平成25年度の電気使用量の総量が333万kWで、発電量は115万kWであり、充当率は35%程度となっている。

生ごみのバイオガス化事業の効果としては、適正な分別等の周知を図った結果、市民の理解と協力を得られるようになった。また、適正な分別が行われるようになると同時に生ごみは減った。結果、施設管理費削減にもつながった。既存施設の利用による整備費の減額や、埋め立て処分場の延命化のほか、ごみの削減によって焼却施設が従来の計画より小型化され、そういった点でも費用の削減になった。

最後になるが、施設の下水処理場と併せて生ごみを処理する方式は全国で3例目ということで、国土交通大臣賞など3つの賞を受賞させていただいた。

●話題提供②

「富良野市のごみ分別」

北海道富良野市市民環境課環境係 小笠原竹伸

富良野市の人口は23,000人強で、世帯数は10,000世帯程度。北海道のほぼ中央部に位置し、面積の7割を山林が占めている。基幹産業は農業・観光で、おいしい玉ねぎやにんじん、スイートコーン、じゃがいも、メロンを生産している。

富良野市のごみの分別区分と収集処理の推移をみると、最初は全量埋め立て処分していた。しかし、すさまじい悪臭、ハエ、きつねやカラスも大量発生し農地に被害も出ていた。原因は生ごみであり、そのため生ごみを処理するシステムを模索することになった。折しも富良野市の基幹産業である農業において、化学肥料の影響による土地の有機質の減少が問題になっていたため、生ごみを堆肥化して農地に還元できないかというアイデアが、ごみ分別の契機になった。

そうした中、処分場の容量がいよいよ逼迫してきたこともあり、昭和58年に3種分別からスタートした。昭和63年には6種分別に拡大され、およそ半分が資源化されるようになった。この当時は富良野方式と呼ばれリサイクル先進地と評価されるようになっていた。その後、社会情勢の変化などへの対応も求められたが、その中でもインパクトが大きかったのはダイオキシン問題。国も法規制に乗り出し、焼却処分場の規制も厳しくなった。富良野市は小さな町なので、24時間燃焼をしないと焼却場の温度管理が難しいといったこともあり、ダイオキシン対策はなかなか難しいものがあった。

しかし、早くから分別に取り組んできたことから住民には分別の習慣が身につけており、それならば住民のそういったスキルを活かしてさらに発展させ、リサイクルをより推進しようという方向性を打ち出した。平成13年に14種分別に踏み切り、「燃やさない・埋めない」をテーマに、燃やさざるをえない動物の死体や紙おむつなど、資源化がどうしても難しいものを除いて現在では90%以上が資源化されている。広域処理システムについては、富良野生活圏構成5市町村による広域分担を行っており、富良野市は生ごみの処理を担っている。

富良野のごみの中身を重量比で分けてみると、固形燃料ごみ、生ごみがそれぞれ1/3を占めており、残りの1/3を何とか資源化している。この中で、焼却処理は7%強、埋め立て処分は0.39%で非常に微々た

る量であることがお分かりいただけると思う。分別を実施することで、現在はごみの収集量の90%近くをリサイクルに回している。

一般ごみと呼ばれていた焼却ごみは、14種別に踏み切った平成13年を境に激減した。7%の焼却するごみは広域分担によって他市で処理されており、富良野市は3基あった焼却炉を全廃した。当時は容り法の受け入れ基準も緩かったため、プラマークがついていないものもプラスチック類として排出したりしていた。しかし、容り協会からこの分別状況では今後受け入れられない可能性があるため、改善の勧告を受けた。リサイクルのまちという自負を持っていたまちにとって、これは大変な衝撃だった。そのため平成19年に、一念発起して規制を強化した。この時に指導の強化をしたところ、指導シールが貼られて回収されなかったごみでまちがあふれかえった。住民からは非難轟轟であったが、どうして回収できなかったのか、その都度現場でディスカッションしながら説明を重ねた。その甲斐もあり、細かい分別と規制強化がごみの排出量削減につながった。



北海道富良野市 小笠原氏

施設の紹介も少ししたい。広域圏環境衛生センターでは、生ごみ・浄化槽汚泥・し尿を合わせて堆肥化している。製造した堆肥は1,100円/m³で農業者・個人に販売している。堆肥化を始めたのは昭和60年だが、30年にも及ぶ歴史の中で定着し、好評を得ている。ただし量が多くなく、10数戸の農家が持っていったらほぼなくなってしまう。施設の特徴として、臭いを外に出さないことは自慢できる。これは搬入路に2重の扉を設置しているほか、土壌脱臭で吸収することで臭いのない施設になっている。次に富良野リサイクルセンターについてだが、これは昭和63年に竣工し、平成14

年に更新された。ここでは RDF 化を行っているが、大きな特徴として、生ごみを加えていないので乾燥工程がない。そのため熱源が不要となりコストが圧縮できる。これが富良野市の RDF 事業が全国でもまれにみる成功事例となっている理由と言える。

大型ごみ・電気製品を除いて無料で、ごみは指定袋を使って出してもらっているが、袋の実費のみで処理費用は転嫁していない。これは分別をしてくれる家庭の手間を費用に換算しているためである。ごみで一番重量を占めているのは生ごみであり、その多くは水分のため、市民には徹底して水切りや付着物の除去をお願いしている。市民の協力を得られることで、選別工程にかかるコストが大幅に削減されている。

粗大ごみ・電気製品は平成 13 年より全量回収を実施しており、これらは手で分解しているため、作業員のコストがかかる。そのため費用をいただいている。粗大ごみ・電気製品については一部認定業者に処理を委託している。

平成 4 年の段階で 1 人当たり 827g だったごみの排出量は、20 年で 2 割以上減った。ただ、もちろん課題はある。草の根レベルの協力を基に成り立っているシステムのため、住民の負担はある。長年の積み重ねでやってもらえているが、高齢者には大変であり、理解してもらえない場合も多い。完璧であることが理想だが、それは難しい。どの程度でバランスを取るかというのが大きな課題になっている。

●話題提供③

「ニセコ町のごみ処理と資源循環の取組み」

北海道ニセコ町町民生活課 千葉敬貴

ニセコ町のごみ処理は羊蹄山麓 7 町村での広域処理を行っている。燃やすごみは倶知安町で、燃やさないごみ・粗大ごみは蘭越町で、そして生ごみはニセコ町で処理を行っている。資源ごみについては町内の民間業者に委託している。ひとり 1 日あたりのごみの発生量はニセコ町では平成 23 年度の 860g から平成 24 年度に 892g と、増えてしまっているのが現状で困っている。収集ごみの割合としては、燃やすごみが 35%、燃やさないごみが 6.9%、粗大ごみが 0.1%、生ごみが 26.5%、資源ごみが 25.3% となっている。直接搬入ごみというものもあり、事業者は倶知安町に直接搬入しており、5% を占めている。ごみの性状としては、平成 24 年度の調査では紙類が 46% と大きな割合を占めており、次いでビニールや合成樹脂が 23% となっている。

収集運搬では 17 区分の分別をお願いしており、燃やすごみ・燃やさないごみ・生ごみについては平成 14 年 10 月から有料化している。現状の大きな課題として分別の質が低くなっており、先ほどフィールドワークで見させていただいたとおり、破碎しきれないで埋め立てられているものがある。町内の道路上の空き缶やペットボトルなども多く、5 月に住民に参加してもらって道路のごみを拾ったが、半日の活動で 45L 袋にして 150 袋くらいのごみがあった。それくらい道に落ちているごみは多い。そしてそれをさらに分別することが難しく、最終処分場に行ってしまう。

減量化とリサイクルについては、袋の有料化と容器包装や家電の回収を行っている。事業者の取組みとしてはスーパーでのマイバック運動もやっていたが、定着したうえでその後どうするかが課題となっている。ニセコ町は町民との情報共有を図るひとつとしてまちづくり町民講座をやっており、その中でごみの分別についてももう少し丁寧な説明をすることに加え、住民参加を進めていこうとしている。

ごみ処理経費は年間 1 億 1,700 万～1 億 2,100 万円程度となっており、ごみ 1t あたりの費用は減少傾向にあるものの、収集人口一人あたりの処理費は 25,000 円程度となっている。

ごみ処理の現状について調査したものがあるが、課題が多く見つかっている。先ほど申し上げたように、分別ルールの不徹底が大きい。ニセコ町は外国人の方も含め、町外の人が多く長期滞在し、編入者も多い。そういった方はルールがわからない。転入の説明の際に説明の紙は配っているが、紙を配るだけでは足りないのが現状となっている。不法投棄も課題で、ニセコ町の周辺地域ではゴミのポイ捨てが多い。これは観光客などが車で通過する際のポイ捨てがあると考えている。最終処分場についても、今後 5 年程度で満杯になると考えており、新たな最終処分場の検討が必要となる。

平成 35 年度の目標として、可燃ごみは RDF 化を進めることに決まり、現在設備を建設中である。平成 27 年度からは RDF 化を始めていく。RDF 化できないものについては、住民に対して更なる分別を周知していかなくてはならない。これも課題の 1 つになっている。

最後に排出抑制・再資源化への取組みにとり、町民・事業者の取組みに対する促進・支援を行うほか、行政の率先行動ということで、町外からの編入者、外国人に対して説明会を開くなど、働きかけをきめ細かく行っ

ていくことにしている。古着・古布の分別回収も始めており、役場も含めて拠点をいくつか設置し、実験を開始している。

■総合討論

中村：各自治体の重点排出抑制策の推進において住民力を発揮しているかどうかを、改めて一言ずついただきたい。

数井：恵庭では、平成22年から有料化を始めている。北海道の中でも最後に近いタイミングで有料化をした。導入の段階で市民に対する説明会をかなりの回数行っている。みなさんお金を払うことなので非常に関心が高く、質問も多かった。そのため職員の体制を作り、土日・夜間を問わず、自治会内で人が集まるときには訪問して説明会を何度も開催した。いろんな意見が出るので意思統一を内部でもしなければならぬので、説明会後には部内で話し合いを行った。政策はおかげさまで進展しており、生ごみの分別に関する説明会にも生かされている。

色々な質問があった中で、職員が意思統一して取り組めた、そして市民が自ら市に対して働きかけ、実践していただいた。それがなければ生ごみのしっかりとした分別収集と、計画に対して90%以上という収集量の確保は難しかったと思う。バイオガスの発生量もおかげで計画通りに行っている。住民力という意味ではそういった点かと思う。

小笠原：富良野のごみ分別が成功したのは、「見える形」での分別がなされたからではと感じている。農業が基幹産業なので、堆肥化というのは身近に感じられ協力したいという気持ちを引き出せたように思う。分別がどんどん増えたが、現在では習慣として買い物の際にはごみになるものは後で分けるのが面倒なので買わないようになっている。30年にもわたる歴史が分別意識を醸成していて、特別に減量化を謳わなくても実践されている。大変ありがたい話だと思っている。

千葉：当時よく自治会に説明に行った中で、ごみに対する意識は良くなっていった。しかし新しい住民が入ってくるとそうもいかない。1回覚えれば教育する側になってくれるので、そういった方々の協力を得て、きちっとした分別をやらなければと思っている。

中村：3市町の皆さん、住民力を上げるために説明会・講座を開く努力をされている。排出抑制において分

別は非常に重要な手段。発表者の話を聞いて、まちによって分別の方法がいかにか違うか実感されたと思う。

では、それでは分別の効果はどうか。ニセコ町では平成27年度からは燃やすごみの分別を変えるそうだが、そこで住民に新たな負担をお願いすることになる。丁寧な説明をはじめ、色々と努力が必要になると思うが。

千葉：RDFを進めていく予定だが、RDF化も富良野市など特別なものを除いてほとんど失敗しており、広域処理を共に行っている町村も反対だった。しかし、方向性が定まった以上、住民の方々に理解していただいて、分別の取組みを強化しなくてはならない。方法はこれから検討をするが、周知徹底を促すために何回もやる必要があると思う。

中村：RDF化においては今までのもやすごみと同じものをそのまま出してもらおうのか。

千葉：衛生用品と紙おむつは別の透明なごみ袋に入れていただき、それ以外は今まで通りに出してもらう。なので、同じ燃やすごみの袋に入れていただいて構わないが、それだけは袋の中で更に別の袋に入れていただくということ。

中村：それでは次に富良野市さん、先ほどの分別のお話で一点確認したい。プラスチックごみという表現があったが、容器包装の「その他プラスチック容器包装」だけを指すのか、それとも容器包装以外のプラスチックごみもその中に入っているのだろうか。

小笠原：プラスチック類については、容り法の対象品目のみを対象にしている。かつてはそれ以外も含まれていたが、品質的な問題が生じたので、今は対象品目のみに限定させていただいている。

中村：RDFの素材は紙と繊維・木・プラスチックとなっているが、このプラスチックは容器包装以外のプラスチックということか。

小笠原：そういうこと。

中村：先ほど課題についても述べていただいたが、富良野方式とって全国的に有名になった方法が定着し、そして市民が誇りに思っているが、現在は課題もあるということで、その課題に対してどのように対処されるか、そしてその中で住民力をどのように発揮しているか、もう少し詳しく伺いたい。

小笠原：住民力という観点では、役割分担という考え方を持っている。しっかり分別してもらえれば我々が適正に処理するので、みなさんは排出の段階でしっ

かり責任をもって分別してくださいねという感覚。平成19年からお願いしているが、それから町内会の目の色が変わった。人手が足りなかったので、直接住民の方に説明するのも順番だったが、説明が行われた町内会から徐々に分別が徹底され始め、それから隣接する町内で切磋琢磨し、相乗効果で分別が促進された。非常に助かっている。

今後の分別の行方については、こうして生まれた住民力、分別スキルを当面維持していきたいと思っている。ただし、その中で指導する基準があり、異物の混入はどこまで認めるか、さじ加減を調整する必要が出てくるかと思っている。容リ協会の基準が見直されるといふ噂も聞いているので、それも含め考えなくてはならないなと思っている。

中村：それでは恵庭の課題について。生ごみをバイオガス化することで、かなり効果が上がっている、住民力が発揮されているようだが、その中で課題があれば。

数井：少々生ごみと異なるが、恵庭市のごみの収集体制はステーション方式が基本だが、十数年前から管理できないからやめたいという自治会では戸別収集に替えたところ、どんどん戸別収集に代わっており、回収費が高つくようになっていく。集合住宅は管理者の収集ステーションの設置義務を条例で設定したが、周辺の住民からごみの放置など苦情が多い。そういった場合は条例の履行を管理者に対して指導する。また、分別が徹底されていないゴミについてはシールを貼ってステーションの中に置いておく。それが1週間2週間と放置されると管理者に処理するよう通告する。戸別収集は分別がしっかりしてなければシールを張って回収しない。近隣住民の目が気になるため、まじめに分別するようになる。そういう経緯もあり、平成24年4月から生ごみの分別を始めたが不適物の量は少なかった。生ごみ施設を色々と調査した際に、様々な不適物によって施設が壊れてしまい、修理費用がかさんだという話を伺い、不適物を減らすよう説明会を重ねるなどして住民の協力をいただいている。施設が稼働して1年半になっているが、家庭系ごみによって施設が止まったといったトラブルは起こっていない。事業系のごみについても同様に収集しているが、担当者がスーパー・コンビニを回って分別を説明し、協力を要請しているが、分別が甘く、施設をストップさせることがしばしばある。

生ごみについては週に4日収集しており、その中でも月曜日に集中して集まってくる。施設は18 t / 日の処理能力だが、24～25 t集まってしまうこともあり、その場合には複数日かけて処理するようにしている。

中村：コメンテーターの方から話を聞きたい。排出抑制の大事な柱である分別を考慮したうえで、全国的な見地で分別の方向性についてコメントしていただければ。

●コメント 環境自治体会議アドバイザー 庄司元

お三方のお話を聞いて、いずれも分別の徹底ということに柱に様々な取組みをなさっているということだった。今日のひとつのキーワードである「住民力」という視点から各自治体の取組みを考えてみた。住民力の定義は難しいとは思いますが、昨日のパネルディスカッションで、「住民力・行政」という対比でお話をされていたように思う。そのなかで住民力というのは今日の話の中では「理解力」というのがあるのではないかなと思う。分別を徹底したり、新しい仕組みを作るうえで、説明会を開く必要がある、そして住民の理解力が必要となってくる。そこが住民力なのではないか。そういう意味では住民力というのはもっと積極的な意味があるのではと思う。具体的にいえば、堆肥化を考えるうえでの生ごみの水切りや減量化、食品ロスの問題など、発生抑制に住民力を生かしていくには、住民がもっているはずの潜在力を生かすことが必要になってくるのではと思うし、今後の課題になってくるのではと思う。

●コメント 東京都足立区副区長 石川義夫

東京23区では清掃工場の運用を共同でしており、清掃事業については東京都から移管されて、収集・運搬は各区で取り組んでいる。足立区は人口が67万人で、東京では下町に分類される土地。話題提供自治体の話を聞いてうらやましいと思ったのは、住民との対話によって協力を得て分別が行われているということ。足立区はもやすごみ、もやさないごみ、資源ごみという分別。資源ごみについてはペットボトル、紙やびん・かんとあるが、基本的にはこれだけで、燃やせるものは燃やしてしまおうという現状で、それらは発電に回している。

燃えないゴミは足立方式としてやっており、行政が手作業で91%分別し、資源化している。住民によるきめ細かな分別を足立区でやることを考えると、事業効

果をしっかりと提示する必要があるのではないかと思います。ごみを減らすだけでなく、減らすことによって施設の延命化や、資源のリサイクルの状況など、一定の効果があつたことを理解していただく必要があると感じた。ところで、不法投棄についてどのような対策をされているのか。

小笠原：不法投棄は非常に少ない。住民による春先の一斉清掃活動ではたばこの吸い殻や古ぼけた空き缶などは出るが、それほど大きなものはない。住民意識の高さがなせる業なのかどうかはわからないが、対策費用は年間で10万円もかかってない。不法投棄を良しとしない雰囲気醸成が大事なのではという実感している。

数井：恵庭には不法投棄がある。不法投棄が不法投棄を呼ぶと考えているので、もし見つかった際には即刻撤去するようにしている。不法投棄対策として、非常勤職員によるパトロール隊を組んで、見つけ次第中身をチェックして、氏名等が判明した場合には警察に届け出るようにしている。今まで不法投棄で逮捕された人もいると思う。

●コメント 北海道斜里町長 馬場隆

非常に悩みながらごみ処理をしている。斜里町は平成6年から分別を始めて、現在は14品目程度の分別を行っているが、基本的な姿勢としてはリサイクルできるものについてはリサイクルする、生ごみは堆肥化し、それ以外の一般ごみについては、高温高压処理して燃料にする取組みを平成24年から始めた。新しい処理方式を含めて、新しい場所でやっているが、その中で様々な課題を抱えている。

一般ごみについては資源として循環させるようにしている。生ごみは住民の啓発を行ってある程度効果は出てきているが、水分処理がネックになっている。そういう中で、ゴムと鉄関係が高温高压処理では処理しきれず、それらは別区分で回収している。小型家電の回収を昨年10月から始めており、その前の2か月程度集中的に説明会を開催したが、かなり多くの住民に集まっていただき、質問も数多く出た。関心が高いだけでなく、自分のこととして協力しようという思いを感じた。その後も水分で困っていると話すと、何かほかの方法があるのではと提案をしていただいた。そういう意味では住民の力をもっともっと引き出さないといけないと思っている。いずれにしてもごみを単に捨

てるということではなく活かすということによって余分なものが出ないことにつながると考えている。そのためひとつひとつの取組みを大事にしていきたい。

もうひとつの課題として、観光地である知床半島が羅臼町とまたがって立地しているが、この二町では処理方式・収集方式が異なる。統一まではいかななくてもいいが、捨てずに資源にしていくという前提を踏まえたいうえで、方法を検討していかなければならないという課題がある。

■総合討論

中村：隣町と分別の方法が違うので観光客が戸惑うというお話があつたが、ニセコ町、富良野市はどうか。

千葉：羊蹄山麓町村では方式が一緒で、取り組んでいる。

小笠原：富良野市も広域処理しているので概ね似通っているが、やはり異なる部分もある。そこはうまく説明をしていくしかないが、観光客の方には、旅館協会などの協力を得ながら宿泊者の方にも一定のご協力をいただいて取り組むようにしている。そのため事業者の負担もある程度減っているかと思う。

中村：昨日のパネルディスカッションで、住民とはそこに住んでいる人だけではなく、そこを通過する人も含めて考えるというような話もあつたが、そういう観点から観光客への啓発も住民力を高める、あるいは発揮する手段として重要ということかと思う。

参加者：住民の立場から質問させていただきたい。高齢者や認知症の方、一人暮らしをしている方など、分別が困難な方に対するサポートの事例があれば伺いたい。それと分別が多い場合の、収集場の場所はどうしているのか。

数井：高齢者・認知症の方への対応としては、介護保険の適用でヘルパーさんなどサービスを使っただくことになるかと思う。隣近所でサポートするというのはプライバシーの問題もありなかなか難しいと感じている。

小笠原：高齢者対策は高齢者担当部署の支援も受けながらやっている。支援をしている方々にしっかりと情報提供をして現状は何とかなっている。ただ、要介護者ではなくても分別がうまくできない人はいる。そこは我々の方で地域の方の協力を得ながらやっている。分別は細かいが、それなりに裏ワザというか、負担を減らす手段はあり、そういった方法を提示するようにしている。分別数は多いが、場所をとるものは意外と多くはない。缶・ペットボトルはそんな

に出ない。一時的にレジ袋に入れたものを物置に置いた指定袋に移し替えるなど、保管方法について工夫している。

千葉：ニセコではヘルパーさんが分別の世話をしている。

中村：最後に「暮らしから見る廃棄物・資源」という観点から話をしたい。廃棄物は環境問題へのとっかかりとして最も取組みやすい一方で、「施設が近くにあるのは嫌だ」という意識が住民には根強くある。そういった市民意識を前向きに変化させていくにはどういう方法があるのか、コメンテーターの皆さんから意見・アイデアを伺いたい。

馬場：人間が生きていく上で、ごみは出る。身体から排出されるものを見れば健康状態がわかるのと同じように、出しているごみを見れば生活がわかる。生きていくうえで必要なものなのだが、新しい場所に施設を作るのはやはり大変だった。これは施設を建設する地域の問題ではなく、町民一人一人の問題であり、受け入れてくれた人の心を理解してもらえるようにずいぶんとお話をしたのだと、今日のお話を伺いながら思った。

石川：どうしても「迷惑施設」というのは否定できない。ならばどうやって還元していくのかをしっかりと考えなくてはいけないと思う。施設で還元するのか、あるいは清掃工場で発電した電気を配るであるとか、施設をきれいにしてみなさんが来られるような施設にするのもいいかもしれない。

庄司：ごみ処理の目的は適正処理、環境に負荷をかけずに片付けましょうということ。ごみ処理というのは本来あと片付けに過ぎない。しかし循環の概念が生まれることで、あと片付けからものづくりに変容している。新しい価値を生み出すものを作り出している。ごみ処理をただ行えばお金がかかるが、ものづくりへと変換していくことで新たな価値を生み出すことができるし、市民に還元することも可能になる。

NIMBY(Not in my backyard) から PIMBY(Please in my backyard) という話があったが、そうなる可能性は十分あると感じているし、適正に処理するための住民力から、新たな価値を創造するための住民力へと変貌する可能性を持っているのではないかと思う。

千葉：「住民参加」と「情報共有」がニセコ町のまちづくりの基本。ごみ処理にあたっては住民参加と情報共有がなければあの施設はできなかった。今後もそ

れを大切に続けていきたい。

小笠原：住民にいかにかが重要であり、今後とも根気強く説明を続けていかなければならないと考えている。ごみの分別に正解はなく、地域に合ったやり方があると思う。構成する住民を考慮したうえで、その地域にとってベターな手段を考えなければならないということ念頭に置いて、今後も取り組んでいきたいと改めて思った。

数井：恵庭市では埋め立て処分場の建設、焼却処分場の場所の選定をしている。住民との話し合いもしているがなかなか立地を選定するのが難しい。それでもごみ処理場は必要なので、今後は建設にあたり、ごみの分別の見直しをしなくてはならない。高齢化という話も出たので、焼却施設を建設する際には生ごみの分別をやりなおして、高齢者への対応を考えなくてはならない。住民の意向を十分汲み取ったうえで進めていく必要があると思う。

中村：話題提供者、コメンテーター、そして会場の皆さんから非常に意義のある意見を頂けたと思う。時代の流れ、社会の要請に応じてごみ処理も形を変えていく。適正処理から循環利用ということで、付加価値を高める、熱利用や電気利用も踏まえた住民への還元策も考えなくてはいけないという意見もいただいた。今後時代に応じて分別の方法も変化していくのだと思う。地域の特性に応じて変化していく。ここで行われた議論が各地に良い影響を与えられることを祈っている。



フィールドワーク：ニセコ町堆肥センター